紀行

シンガポール研修旅行

湯浅　博

（香里中学校・高等学校教諭）

海外への修学旅行を実施する高校が増えるなど、高校教員が海外事情に精通することが課題になっています。今号の紀行文は高校教員が海外におもむき研修するツアーに参加された、香里高校の湯浅先生のシンガポール訪問記です。この研修旅行はツーリストが企画したもので、国公私立高校の十二人の先生たちとの旅行でした。

二年で様がわりのシンガポール

今回の研修旅行では自由時間が与えられたので、私は迷うことなくラッフルズホテル（この国で一番高級）へ行きました。そしてそのロビー近くのゆったりした雰囲気のカフェバー（青木　保著「憩いのロビーで」に掲載）でコーヒーを注文して、それを飲みながらこの旅について思い返してみました。

前回（〇一年夏）の時シンガポールは、ともかく「クリーンシティー、ガーデンシティー、小学校四年生のテストでその後の人生が決まる」など、厳しい面のみを強調されたのが印象的でした。しかし今回は、「何事にも世界最初、最大をめざす」という「向上心、自負心」が、この国のコンセプトといわれて、わずか二年の間にそんなに変わるのかなあと半信半疑でした。

まずマーライオンの像が移動しました。以前の所の近くに道路がつき見にくくなったので、旧郵便局を利用したホテルや超高層ビルを背景に水を吹き出す像は、生き生きノビノビしたようです。次にＭＲＴ（Mass Rapid Train　都心部は地下、郊外は地上を走る無人運転電車）です。前回下見した時は、確か日本と同じシステムで、行く先を確認しコインを入れ、ボタンを押すという方法だったと思ったのですが、今回は日本のＪＲの「スイカ」「イコカ」のように改札口にカードで触れるだけで通過できるようになったことでした。そのカードは、「スタンダード　カード」と呼ぶ極めてビジネスライクな名前でした（一シンガポールドル八十セントで、一度乗ったら一シンガポールドルでデポジットするので、結局八十セント＝日本円で五十六円以下という安さでした）。車内は、吊り皮が中央にあり、座っていても立っている人を気にしなくてもよいというこ

とです。ただホームが中央にあり、両側にレールが走り、入ってくる電車は最終行き先をつけていて、しかも日本のようにホームにはその駅の前後の表示がないので、一体どちらに乗れば良いのか迷いました。

さらに新しい建物もいくつかできていました。「エスプラネード・シアター」というドリアンのような形をした劇場などを含む建物やコンベンションホール等でした。ホテルのドアを開けるのは、今や鍵でなくカードになっているのが多くなっていますが、エレベーターに乗るときにはその同じカードを階を示すボタン群の下に挿入しないと、自分の行きたい階へは行けない、というよりもエレベーターは動かない。つまり泊まり客でない人は乗って動かせない、というシステムになっているのです。この国のホテルのどの程度がそうなっているのかは知りませんが、ラッフルズホテルは無論のこと、私たちの泊まったホテルもそうでした。私たちの行った時期がクリスマスだったせいか、町中はゴミで汚れて前回ほどはクリーンでありませんでした。街路樹は豊かで高速道路もまるで森林の中を走っているような風景でした。

シンガポールからマレーシアへ

十二月二十五日、集合の空港四階のカウンターには五～六人しか集まっていませんでした。飛行機の席が取れなかったので前日に出発した人が数人いたことを知りました。シンガポール・チャンギ空港に着くとガイドのケン（康）ちゃんがお出迎

新しいマーライオン公園

え（中国系インドネシア出身）。市内の中華料理店で先発隊と合流、自己紹介、兵庫県公私立七人が一番多く合計十二人。ホテル到着後、オーチャード通へ散策に出ました。クリスマスのイルミネーションは美しかったのですが、町がクリーンでないことに気づきました。また、この通りは横断歩道が少なく店を一通り見ないと、向こう側に渡れません。我々はイライラしましたが、他の人々は悠然と歩いていました。

十二月二十六日、マウント・フェーバー（一〇五メートル）へ行きました。この国では一番高い山でも一七六メートルですので、これでも高い方です。埋め立ての土は、マレーシアやインドネシアから運んでくるそうです。午後にはチャイナタウン、アラブストリート、リトルインディアの順に回りました。前回はアラブ人やインド人が本国以外の所で狭い場所に固まって住んでいるのが異様に移りましたが、今回は短時間の見学の間にインド人街でまたビーディ（インドの街角で売っている小さな葉巻）を買いました。ナイト・サファリへの出発の前に、その場所で日系人ガイド、ミセス ミラーと夕食を摂り、彼女の案内でトラムカーに乗ってまわりましたが、とても説明が上手でしたので、四十分があっというまに過ぎました。ホテルに帰ってからすぐ隣の高島屋が九時半まで開いているというので行ってみました。なかなかの賑わいで、地下の食料品店は長蛇の列で、一人が並び一人が商品を選ぶという方法をとりました。

十二月二十七日、十時にシンガポール政府観光局へ行き、まず説明がありその後、質疑応答がありました。ここ三年は観光客が激減して、やっとこの秋から回復の兆しだということでした。ＳＡＲＳへの対応については、この国では入国時に徹底的にチェックがあり、少しでも反応があれば即入院とのことでした。その後ジョホール海峡に向かいました。出国に際しては、車のガソリンを満タンにしなければならないそうです。一キロほどの長さの橋を渡るとマレーシアで、徒歩で行き来している人も多くいました。橋の横には単線のマレー鉄道と水道管がありました。昨年マレーシアが水の値段を上げるという話がありましたが、まだ上がっていないそうです。無事ジョホールバルに入り、昼食はビュッフェスタイルのマレー料理でした。食べているうちに汗が出てきてあまり食べられませんでしたが、ツーリストの人々はずいぶん食べていました。そのうちの一人は、シンガポールにもう十二年もおられるそうで、炎熱の地で暮らすにはこれくらいの食欲がないといけないのかなあと思いました。バティックの実習は面白かったですが、黙々と下絵なしに図案を描いているおじさんには感心しました。マレー語が話せればいろいろ聞けたのに残念でした。

カンポン（田舎）で民家を見学するということで行きましたが、歓迎のダンスまでは良かったのですが、結局は銀製品とピュータ（錫）製品の売り場に連れて行かれ、観光化し過ぎていました。その後、回教寺院、王宮博物館へ行きました。寺院は中へは入れませんでしたが、充分その立派さが窺えました。博物館の入り口で体格の良い係員に「スラマット ブタン」というと「スラマッ ブタン」と訂正されました。前回よりゆっくり見学できましたが、スルタンの家族の部屋の立派さ、ヨーロッパや日本からの金銀製品や陶磁器の豪華さには圧倒されまし

た。しかし何代目かのスルタンの趣味であった動物を集めた部屋は、象や鹿などの脚で作った傘立てや灰皿があり嫌になりました。イギリス人の妃の肖像画があり、その人は第三婦人であったことがわかりました。ガイドがマレーシアの若い青年で、今年できた立派な市役所の建物を説明してくれましたが、その横に残っている山下将軍の建物や第二次世界大戦の話は一切ありませんでした。イギリス、オーストラリアの戦没者の墓地に行った時、墓標に刻まれた年齢を見て「二十」とあり胸が詰まりました。ケン（康）ちゃんと以前に行った他の墓地の話をしていて、「飛行場の近くで、日本軍と英・豪連合軍の陣地が示してあり、博物館もあり日本のことを良く書いていないのは、どこだったかなあ」と聞くと、「それはサンダカンでしょう」とのことでした。ケン（康）ちゃんも日本人の退役軍人のツアーでそこに行ったことがあるそうです。

マレーシアの出国とシンガポールの入国の手続きは各自で行うことになりました。マレーシアは簡単でしたが、シンガポールは知らないうちに体温が測られ、その測っている画面を振り返って見ていると、「早く行け」とせきたてられました。早くホテルに帰りたかったのに、途中約一時間ほど免税品店に寄りました。私は見るだけでした。

夕食はモンゴリアン料理プラスアルファで生の食材が置いてあり、自分で牛肉か羊肉か選び、野菜も加えてコックに渡すと円形鉄板でオーバーなアクションで焼いてくれました。その他刺身や寿司もあり、その上参加者のN氏が誕生日ということで、まずハッピーバースデーを唄いその後、最後の夕食ということでシンガポール政府観光局の人やツーリストも交えての懇親会になりました。八時半頃お開きになり我々二人を除き、ラッフルズホテルの有名なロングバーに繰り出しました。我々はホテルにもどり絵はがきを四枚書いた後、MRTでラッフルズホテルへ行き中庭でそよかぜにふかれてクーバリブレを飲みました。寝る前に先程誕生会のN氏に電話をして部屋へ行きました。彼は京都の私立高校勤務で修学旅行や学校のことについて意見交換をしました。

十二月二十八日、ロープウェーもあったのですが、本番を想定してバスでセントーサ島へ渡りました。それからモノレールでアンダーウォーターワールド（水族館）まで行きました。通路の横にムービングウォークがあり、それに乗ってでも回れました。二階建てバスで昆虫館、博物館へ行き博物館をまず見学しましたが、一時間では足りずマレー人の生活展示は見られませんでした。昆虫館へは行く間がありませんでした。昼食はアジア村で日本食の弁当だったのですが、スキヤキ、トンカツ、みそ汁などでした。みそ汁のお代わりをいうとコーヒーを入れるようなヤカンで入れてくれ、味気ない思いをしました。午後は自由行動でしたのでまたMRTでラッフルズホテルへ行き、冒頭に書いた場所でコーヒーを飲み少し歩きました。世界一高いホテルの前を通り、新しくできたエスプラネード・シアターに入り、ホテルまで歩こうとしましたが迷ってしまい結局シティーホール駅よりMRTで帰りました。夕方またセントーサ島へ行きラサ・リゾートホテルを見学し夕食をしました。飲み物はそこの日系女性に「何がお薦めですか」と聞くと「シンガポ

ールスリング」といわれたので、それをご馳走になりました。とてもさっぱりしていて何杯でも飲めそうでしたが他のものも飲みました。

八時四十分のファウンテンミュージックショウを観てチャンギ空港へ行きました。出発ゲートがFからEに変更されましたが、ほとんどの人が私がいうまで知りませんでした。やっと日本語の放送が入り、皆「やっぱりそうだったのですね」といったので、私は「皆のために日本語の放送を入れてくれといった」というと本気にしたほど疲れていました。

高校生の海外修学旅行事情

本校では、九八年からハワイに行っています。「修学旅行を海外に」と提案された時は、賛否両論がありましたが、もう五回目（〇一年は国内に振り替え）になりました。そのテーマは「平和学習、異文化理解、現地との交流」でそれに合うように事前学習をし、現地のプランも練られましたが、オアフ島しか行っていないので、私がつき添って行った時には、何だこれは買い物ツアーの様ではないかと思った時もありました。また費用も約十七万円で他校より群を抜いていました。

その後、公立校で海外旅行が解禁され費用も十万円以内ということで韓国、中国、東南アジアが多く、いろいろと実践報告も聞きに行きました。茨木高校のモンゴルに行かれた例や花園高校では国際コースがグアムでその他がオーストラリアというのも聞きました。いずれも事前の準備がすごく、この点では本校は先発校にもかかわらずあまり進んでいないと思いました。

さらにツーリストがここ三年ほど前から競って研修ツアーを組み、私は〇一年八月シンガポール（日通旅行）、〇三年三月タイ（JTB）そして今回のシンガポール（日本旅行）と参加しました。個人的には歴史のあるタイが面白く、ここのエメラルド寺院などを見れば、日光の東照宮など見なくても死ねると思いました。今後、今までの私の経験が何かに反映できればとこの原稿を書きました。最後に今回の旅行に同行し写真などを提供してくださった本校の岩﨑先生に感謝しています。

エスプラネード・シアターをバックに著者